別紙２　令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 大宮国際中等教育学校 ）　　学校番号　501

目指す学校像	大宮国際中等教育学校は、よりよい世界を築くことに貢献する地球人の育成を目指しています。 そのため、学校生活のあらゆる機会を通して、未来の学力を備え国際的な視野を持つ生徒の育成を目指します。
重点目標	1　探究的な学びの充実を通じて、学習や諸活動に能動的に取り組もうとする生徒を育成する。 2　校内の教育相談や生徒指導体制をさらに充実させ、ICT も効果的に活用しながら、生徒が安心して学校生活を送ることのできる環境を整える。 3　情報発信を通して本校の魅力を地域に伝えるとともに、地域の教育資源を活用して教育のさらなる充実を図る。 4　IB 教育に対する教職員間での共通認識を確立するとともに、教職員一人一人がより深く理解することで、より質の高い教育活動を実現する。

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価

番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会による評価（実施日令和２年２月２２日）：学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1（学力向上に関する取組）	○多くの生徒が、授業やポートフォリオ検討会などで、受け手を意識した質の高いプレゼンテーションや資料作成ができている。しかし、総括的評価課題の評価結果では、内容等の質的な部分については、今後さらに発展させていく余地が見受けられる。 ○日頃の探究や個人の興味をベースに、社会や世界へと視野を広げ、生徒エイジェンシーを効果的に発揮する生徒が複数観られるようになった。一方で、自主的に探究を深めたり、能動的に社会貢献をしようとしたりする態度が弱い生徒も多い。	探究的な学びの充実	・3G Project において、4 年次の PP を最終目標として各学年の到達目標を設定し、より効果的な形成的評価を用いて生徒の探究活動を支援する。 ・各教科で、探究の要素を含んだ授業を意図的に取り入れ、生徒がより深く探究したり、他の活動に転移したりする機会を提供する。 ・生徒がより深く探究する時間を確保するために、総括的評価課題の数を前年度より 2 割削減するとともに、課題の実施時期の重複を調整できるようカリキュラムマップを作成する。	・生徒に対する学校評価アンケートにおける「アドバイザーによるアドバイス・フィードバック」に関する設問への肯定的な回答の割合が 90%以上 ・探究発表会や研究発表会などに参加した外部参観者アンケートによる肯定的な回答の割合が 90%以上 ・カリキュラムマップを作成・活用し、各教科で総括的課題の数を前年度比 2 割削減	・3G Project における「アドバイザーによるアドバイス・フィードバック」に関する設問への肯定的な回答割合が 93%であった。 ・外部参加者アンケートにおける肯定的な回答割合は 93%であった。 ・総括的評価課題の数については、昨年度より多少減ったものの、ほぼ横ばいであった。意識的に数を減らした教科・科目が複数あった一方で、逆に課題数が増えている教科・科目もあった。	B	・３G Project については、より系統的な取組・指導ができるように現在カリキュラムを改善中である。また、来年度に向け、教員向けのアドバイザー研修を充実させる。 ・課題については、数は横ばいであるものの、それらが授業内で取り組み終わらせられるようにするなどの配慮が各教科で見られた。現在カリキュラムマップの整備と課題の位置付け方の改善を進めており、来年度は課題を授業内で完結できるようにしていく。	総括的評価課題は数だけでなく、質と量、授業との関連性も踏まえ、早めの段階から検討する必要がある。生徒が家庭で使える時間には個人差があるため、授業時間内で完結できる課題設定を徹底すべき。今後も継続して、学校が生徒に期待するレベルと生徒にとって適切な課題かどうか、また、量と質のバランス等について確認し、改善を続ける。本質的な概念理解を説明させるといったパフォーマンスベースの課題を増やしてもよいかもしれない。能動的に取り組む生徒の育成について、校内外のワークショップ参加が指標となっていることについて検討の必要がある。また、ワークショップ不参加者の不参加理由なども検証し、より具体的な改善策を作る必要がある。
		能動的に取り組もうとする生徒の育成	・ASA や長期休業中の生徒が活動できる環境を充実させる。 ・授業で取り組んだ内容をさらに深掘りし、探究の質を向上させるための「探究ワークショップ」を各教科で企画・実施する。	・生徒の校外コンクール等への参加者数が全校生徒の半数以上 ・生徒企画のワークショップの実施数が年間 80 回以上 ・LDT を含むワークショップに生徒全員が最低 1 回は参加	・全校生徒のうち、41%の生徒が校外コンクール等へ参加した。 ・生徒企画のワークショップの実施回数は 100 回であった。 ・今年度、一度もワークショップに参加していない生徒の人数は 124 人であった。	B	・生徒が何かに自ら参加してみるという点については十分ではない。日ごろの学習や活動とのつながりを意識した機会の設定やそれらの生徒への紹介、自ら取り組んでみようと思える環境作りなどを行っていく必要がある。	
2（安心・安全に関する取組）	○年間 3 回実施している、生徒の悩みについて把握するための「心と生活のアンケート」結果から、多くの生徒は学校生活に前向きに取り組んでいるが、人間関係や学習面に不安を抱える生徒もいる。	教育相談・生徒指導のさらなる充実	・生徒指導部と学年担当との情報共有の機会を隔週設定し、緊密な連携と迅速かつ適切な対応を図る。 ・ICT を活用し、生徒情報の収集および分析をより効果的に実施する。	・不登校生徒、長期欠席生徒に対する支援について、毎月 2 回以上専門家を交えて検討 ・教職員アンケートにおける「分掌（生徒指導部）と学年との情報共有・連携」及び「ICT の活用による効率的な情報収集および分析」に関わる項目それぞれに対する肯定的な回答割合を 90%以上	・隔週で、生徒指導部・各学年生徒指導担当・さわやか相談員・SC・養護教諭・管理職の会議を実施し、不登校生徒への対応を検討・共有した。 ・肯定的な回答がそれぞれ 90%以上となり、生徒についての情報分析と共有が行えていた。	A	・多くの事例が出てきたため、一つ一つの事例への情報共有と対応協議に多くの時間を必要とした。文書・ファイルによる共有とケース会議等の対面での協議を組み合わせて、教育相談の効率化と充実を目指したい。	参加コミュニティが少ない生徒に対して「学校とのつながり」を軸に支援する。例えば、異学年交流など興味が自然と向くような場面を設定する。教室に入れることを目標とせずに自然と足が向くような心理的な場所：エントリーポイントをつくる取り組みが必要。そのため（午後のみの参加など）柔軟な判断を検討する。不登校生徒のセルフアセスメントの機会をつくり、自分で選択してよいという意識を持たせる。学びが継続できる環境を確保するために、オンラインの活用や知的好奇心を刺激する授業の工夫が必要となる。不登校になるプロセスと快調に向かうプロセスを理解する必要がある。
		すべての生徒が安心して学べる機会・環境を整える	・ICT 等も効果的に活用しながら、学びの自律と個別最適化を図る。 ・学校行事などを通じて異学年交流等の機会を多く設け、生徒が多様なコミュニティと関わったり、リーダー等様々な役割を経験したりできるようにする。	・学校評価アンケートにおける「学習機会の確保・提供」及び「安心して所属できるコミュニティが複数あるか」という項目に対する肯定的な回答割合を 90%以上	・「まったくない」と回答した生徒は 5%未満であるが、「1 つ」と回答した生徒が 10%程度いるため、そのコミュニティ内でのトラブルにより、自分の居場所がないと感じる生徒が出る恐れはある。	A	・参加できる活動は設定されているが、そこへの参加意欲が低い・課題に追われて参加する時間がないなどの課題を解決する必要がある。	
3（地域とともにある学校づくりに関する取組）	○授業や課外活動において地元企業等と連携した取組が行われるようになってきているが、連携先に偏りがある。（2022 年度の実績より） ○学校の魅力を伝えるために学校行事等を通じて情報発信をしているが、事後アンケートの結果を見ると、本校の特長や魅力をさらに理解してもらう必要がある。	地域などの校外資源の活用	・分掌や各教科で、地域など校外の団体とのコラボレーション企画によって生徒の学習活動をさらに充実させる機会を意図的に設定する。	・地域など校外の団体とのコラボレーション企画（講演型、体験型、協働型）の機会を年間年 10 回以上	・地域をはじめとする校外団体とのコラボレーション企画を計 15 回実施した。	A	・実施回数は目標を上回ることができた。ただし、多くの生徒による参加という点では課題があるので、より多くの生徒の参加を促していく。	コラボレーションしている団体について、生徒発信で地域とかかわるものが少ない。グローバルに活動するうえで必要な土台となるアイデンティティの形成にも地域を知ることが必要。盆栽美術館や地域の祭りへの参加などの他に、コラボレートして新たなものを生み出していくことも大切。LDT などにおいて生徒発信で実施していく仕組みづくりが必要。それらが地域への広報にもなる。
		地域への情報発信	・学校だよりや SNS、学校説明会を通した学校の魅力の発信を定期的に行う。 ・保護者や地域の人が魅力を感じる学校行事を企画・運営する。	・学校だよりを月 1 回発行し、学校 HP や SNS による情報発信を教員・生徒数の立場から週 3 回以上実施 ・学校行事に参加した外部参観者に対するアンケートの肯定的な回答の割合が 80%以上	・学校だよりを月に 1 回発行した。また SNS による情報発信をほぼ毎日行い、保護者や地域、受検希望者へ、学校の魅力を随時発信することができた。 ・案内から説明まで、全て生徒が運営する学校説明会を行った。実施後のアンケートでは 100％肯定的な回答を得ることができた。	A	・内容をより充実させ、魅力を発信していく。学校説明会についても生徒の活躍する場という意味合いと本校の魅力をリアルに伝えていく場としての意義を高めていくため、全体計画をブラッシュアップする。	
4（教職員の資質向上に関する取組）	○開校以来、各教科で、「探究学習」の授業実践についての研究と改善を積み重ねてきた。一方で、学校全体として、本校の探究学習の捉え方の統一が図れておらず、教科によって実践にも差があることが、年間 2 回実施している学校評価アンケートの結果から課題である。 ○IB ワークショップを継続的に実施し、転入教員や新入教員にも IB 教育についての理解を深める機会を設けている。一方で、IB 教育に対する理解・認識の深さに個人差があり、年々その差が広がりつつあるのが課題である。	教職員間の共通認識の確立	・IB や探究学習に関する教科会を充実させる。 ・GRASPS の効果について生徒に説明し、それを活用したユニットプランナーの作成を徹底させる。	・教職員に対する学校評価アンケートによる肯定的な意見の割合を 90%以上 ・ユニットプランナーを活用し、すべての教科と単元で GRASPS が設定されていることを確認	・公開研究会を核とし、教科間の目線をそろえられるような教科会を実施し、肯定的な回答割合が 100%であった。 ・GRASPS を意識したユニットプランナーの作成とそれに基づいた授業の実践についての肯定的な回答割合は 85%であった。	A	・今年度後半からは、開校初年度以来の全体教科会を設定し、教科会のさらなる充実を図っている。 ・来年度に向けてのユニットプランナーに GRASPS の欄を明確に設け、全教員が GRASPS をより意識できるようにしていく。	どの教職員も研修等を通して一生懸命取り組んでいることが伝わってきた。一方で、方法や枠組みばかりに目を向けるのではなく、「学校として何を目指しているのか」「どのような生徒の姿が見られれば研修のねらいが達せられたのか」など、教員間で目標を理解していくことが改めて必要。あるべき生徒像・あるべき教師像と学びの在り方を共有し、具体的に行うべきアクションを明確にする必要がある。また、生徒の変容や成長した姿から、教師自身の資質向上を見取っていく・振り返っていくことも必要なのではないか。
		IB 教育のより深い理解を目的とした校内外研修の充実	・他の IB 校をはじめとした先進校を視察する。 ・経験年数やニーズに応じた段階的な校内研修の工夫をする。	・教職員の研修参加者数の前年度比 10%増加 ・教職員に対する学校アンケートによる肯定的な意見の割合が 80%以上	・教職員の外部研修の参加者割合が昨年度より 25%アップした。 ・校内研修についての肯定的な回答割合は 76%であった。	A	・外部研修等への参加者割合は 66.6%であった。研修内容の共有や参加しやすい学校体制づくりを通して、教職員の学びを促していく。 ・校内研修について、教職員アンケート等をもとに内容を改善し、よりニーズに沿ったものにしていく。	